

後藤美子氏追悼

まごころのひと

木畑紀子

所蔵している歌集『鉦の詩』の扉には「一九九〇年の大会でお目にかかれた記念に 八・二七 後藤美子」と美しい文字の署名がある。福岡市二日市温泉の全国大会最終日に声をかけて下さり、前年刊行の歌集を下さったのだ。カバー装画の麦と魚が、キリスト教に入信したばかりの私の心を捉えた。またあとから経歴を見て、大学の先輩であることがわかり驚いた。その時はお礼を言っただけでほとんどお話をしなかったけれど、さりげないやさしさが沁みだ。私が「棧橋」に入りたての頃なので高野公彦氏から何か聞いておられたのかもしれない（字は違

うが旧姓が同じイトウということも）。

歌集を読み返すと「わが知らぬうれひも持たむ街なかに会へる生徒の笑みの翳るは」という歌があつて、ほどよい距離で他者に寄り添う温かさがよくわかる。

以後も親しいお付き合いをしたわけではないが「歌は人なり」で後藤さんの誠実なお人柄は歌に滲み出ている。ことに師宮柵二への敬愛が篤い。「朝光の舗道にまろび一粒の白き鉦が輝きてあり」は声高ではない師へのオマージュと思う。また例のカバー装画は、詩と版画の雑誌

「まごころ」の編集者であられた父上が、後藤さんの誕生祝いに彫ってくれた木版画と「あとがき」の最後にそつと書かれていた。父への感謝の表し方にも深々とした愛を感じる。初めて声をかけていたから三十四年、ペランダで育てているという清楚な花の写真の賀状を毎年くださった。後藤美子さんは心底からの

まごころのひとだったと思う。

札幌の全国大会で濃やかな配慮を頂いた思い出も忘れたいが、数年前には本を整理しているからと、大切な『宮柵二短歌集成』と『宮柵二短歌索引』を譲ってくださった。短歌を愛し、師をそして父を敬し、後輩を思いやる後藤さんの美しい生き方にあらためて感動している。御魂のご平安をお祈り申し上げます。

ありがとうございました

新保弥代枝

古い支部誌によると、後藤さんは三十歳でコスモスに入会され、その三年後に札幌支部が発足しました。以来、六十年近く支部を育てて下さり、数多の会員が後藤さんのご指導を受けてきました。歌

会では一首ごとに適切な助言と質問への答を下さるので、みな後藤さんを心から尊敬し、頼りにしていました。

高校教師を辞められた後はボランティアで外国人に日本語を教えておられ、歌集『ゆきぐも茜』には興味深い作品がいくつも見られます。

「韓国」の発音が「監獄」になることを今日は直さず練習を終わら

せ、「ゴウトウとゴトウは違います」わが

姓も長音説明の教材につかふ



まごう・よしこ

昭和9年、北海道生まれ。昭和39年「コスモス」入会。平成20年コスモス賞を受賞。歌集『勤め着』『鉦の歌』『十年日記』『ゆきぐも茜』『残果』令和6年1月29日逝去。

ます。若い外国人との交流を大いに楽しむと同時に、国語ではなく日本語に多くのことを発見されたそうです。

十年ほど前、私は勤務先のNHK文化センターで北海道大学の言語情報学講座教授による「日本語を科学的に考える」という全六回の講座を受講しました。初回、知らない人ばかりだと思つて入った教室に後藤さんがいらしてびっくり。講座では世界の言語の中で日本語を見る視点が新鮮で、文法、音声、文字、方言から文化にまで及ぶ充実した内容でした。この時、後藤さんは七十八歳。更に高く広く枝を伸ばそうとする大樹のようなお姿に感じ入ったものでした。

もう一つ私には後藤さんと共通の趣味、編物があります。以前、後藤さんが大層手の込んだニットをお召しで、伺うと高校にお勤めの頃に編まれたとのこと。懐かしそうな柔らかな顔で話されました。ここ三年はコロナ禍のせいでゆっくりお話する機会が全く無くて残念でした。まだまだ教えて頂きたかった！楽しいお話をしたかった！それなのに後藤さんは突然、高く高く天へ昇ってしまったようです。お礼も申しあげていないのに。

札幌の夜から

小田部雅子

茨城の教員だった頃の札幌出張。せっかくの札幌だから後藤美子さんにお会いしようと、後藤さんを夕食にお誘いしました。暗めな照明のレストランが思い出されます。

歌の話も尽きたころ、後藤さんはあつ、と思ひ出しました。

「私は一度だけ茨城に行ったことがあるんです。教え子の結婚式だったんです」

「茨城のどちらですか？」

「茨城の南の方の高校の先生なの」

「まさか、取手じゃないですよね？」

「そう、そう、そこですよ。教科は数学で、〇〇真紀子さんというの」

「ええー！」

びっくりして大きな声が出てしまいました。その真紀子さんは、私が職員室で机を並べている若い方なのです。

そして後藤さんとの交流が始まりました。毎春秋が深まると必ず、おが厩に埋まった沢山の百合根が届きます。ホイール

焼き、バター炒め、あるいは贅沢に使って百合根餡。わが家では後藤さんは「百合根の方」です。私も静岡に越してからは蜜柑や手作り野菜をお送りしました。

折々に長いメールもいただきました。静岡の柿の種から出た柿の木が十階のベランダで育っている話、大地震の時十階まで水を運んでくれた大学生の話、断捨離の苦労、運転免許返上のこと…。嬉しかったのは同人誌「灯船」の創刊に参加くださったことです。そして

誠実に紡がれた歌

後藤美子には、自選歌集『勤め着』を含めて『釦の詩』『十年日記』『ゆきぐも茜』『残果』五冊の歌集がある。札幌に住み、国語教師として生き、夫婦二人の生活のなかで訥々と短歌を詠み続けた。

奇をてらう言葉も無く、目を奪われ

最新号では巻頭二十四首を詠われました。わずかな悔いを秘めつつ生涯を振り返る静かな一連で、深い呼吸が感じられます。行けむかとヘルンリ小屋をあふぎたるとはき日ありき老いて膝病む

平凡な日々の暮しを重ねゆく平凡つつくはちひさげど幸
逆接がわが歌ノートに多きこと弁解しつつ生くるか日々を
ベッドカバーふはり綺麗に広げればけふの一日はゆたかにあらん

池田恭子

るようなイメージの跳躍も無い。だが誠実にありのままに紡がれた歌の有りようは、生きる重みを伴って、読む者の心の奥深くに確かに届く。「ありのまま」と言っても、それは写実とも違い、作者の佇まいや心持ちをひたすら誠実に歌うものだ。その生真面目さ、温かさは五冊の

歌集を通じて共通のものだった。教師としての歌には、生徒ひとりひとりに向き合おうとする、厳しく温かい姿勢が見られる。『釦の詩』より二首。

測りうることにあらずと思ふとき生徒をあらはす数値を憎む
数により事を決する集団の中の「個」として長く勤め来ぬ
決して甘い教師ではなかっただろう。しかし教え子の卒業後をずっと心にかけていたようだ。友人を詠む歌、夫を詠む歌にもあからさまで無い、それでいて深い愛情が感じられる。

腸よわき夫と吹雪のこもりぬにふくふくと煮る鍋焼鱈鮓 『ゆきぐも茜』
後追はぬ病人なりき同じやうにいつも言ひたり「有難うさよなら」

『十年日記』

このような後藤美子の人となり、極寒の札幌の風土に通じるように感じる。長い冬、頬も凍てつく寒さのなかで、己と向き合い深めていったのだろうか。

茫茫たる雪野に青き扉閉ぢブレハブ小屋が吹かれつつ立つ 『釦の詩』
椴松の葉も樺の細枝もしろがねに凍て

て輝く今朝零下十度 『釦の詩』

人の丈はるかに越ゆる雪の壁 道譲り
あふみなひそひそと 『十年日記』

まだ固き冬芽の木々の間より刃の冷た
さの尾根風がくる 『ゆきぐも茜』

己を律する強靱さ、端然とした態度は、
生涯を通じて変わらないものだった。だろ
う。語の選択は、正確で無駄が無い。

言つてみて駄目ならもともとといふ思
考が持ち得ざるものの一つにて

『十年日記』

変り得ぬ己を嘆き歩む午後視界暗めて

よごまの雲 『ゆきぐも茜』

ひつたりと地に貼りつきて雪を待つタ

ンポポの葉の剛直のあを

『ゆきぐも茜』

誤字ひとつ正さず出しし文のこころに
のこし年あらたまる 『残果』

晩年の作品には練達の味わいがあり、
特徴はそのまま美しさも増している。

ぬかみその秋田小茄子の茄子紺の冴え
てひいやり秋の風立つ 『残果』

胴吹きの一葉も黄金にいろづきて銀杏
並木は碧空を負ふ 『残果』

私は残念ながら生前の後藤美子と親し
く会話する機会が無かった。どんなにか

心強く、また温かい励ましを得られただ
ろうかと、その幸福に恵まれた方々を心
から羨ましく思う。だが、幽明界を異に
しても、短歌に触れることによって、そ
の声を聞き人柄に接することができるこ
とを幸せに思う。

後藤美子作品抄（十八首）

いと細き糸とんぼ一つはிரい来ぬ潤一郎
を読みある教室に 『勤め着』

わが一生この札幌にをはらむか冬待つ街
のしろきあかるさ

寒の靄厚くまとひて立つビルの屋上に人
ら風をあげをり 『釦の詩』

北限の栗の林と仰ぎをり小樽色内の岡の
うへの林

果もなく学年末の雑務ありて物思ふ刻の
乏し三月

思はえは遙かなるかな先生が釦の詩を語
りましし日

燕麦の畑の遠にそびえ立ち原子力発電所
あはき煙上ぐ 『十年日記』

祈る意を元に持ちつつ吉凶に別れゆきた
り「祝ふ」と「呪ふ」

幼顔残る兵士ら屯してヨルダン川西岸検
問所多し

書き終へむことを疑はず買ひたりし十年
日記今日より三年目

生きの熱しづかに放つ裸木のめぐりに生
るるゆきどけの円 『ゆきぐも茜』

古稀過ぎてかくたのしむと思ひきやりフ
トに隣る夫が言ひ出づ

どうしても信じられない七十歳ジーンズ
と春のスニーカー買ふ

あつまれば死に方の話をするやうになり
たり還暦のもと生徒たち

背病める友に教へん幼き日母に聞きたる
〈日にち葉〉を 『残果』

水分の奈良井峠を徒歩越えしとほき日の
ありあかりのごとく

乏しらにのこる二月のななかまど残果夕
陽に翳り帯び来ぬ

かけたればたちまち紙面クリアとなるく
ちをしき利器老眼鏡は

（抄出Ⅱ高野公彦）